

遺残尿管へ転移した腎細胞癌の1例

大阪大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 奥山明彦教授)

山田 龍一, 山口 誓司, 瀬口 利信, 園田 孝夫*

SOLITARY METASTASIS TO RESIDUAL URETER RESULTING FROM RENAL CELL CARCINOMA AFTER RADICAL NEPHRECTOMY: REPORT OF A CASE

Ryuichi Yamada, Seiji Yamaguchi, Toshinobu Seguchi
and Takao Sonoda

From the Department of Urology, Faculty of Medicine Osaka University

A case of solitary metastasis to residual ureter from renal cell carcinoma is reported. In November, 1987, a 56-year-old male had undergone left radical nephrectomy with renal cell carcinoma (clear cell subtype, G2, Inf α). He was doing well until June in 1989 when macroscopic hematuria occurred. A tumor from residual ureter with a large blood clot was detected on cystoscopy. A malignant tumor from the residual ureter was suspected and it was extirpated.

Histological diagnosis revealed the same findings as the primary renal tumor. No other metastasis was detected. Only 8 cases of ureteral metastasis from renal cell carcinoma after radical nephrectomy have been previously reported in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 40: 233-236, 1994)

Key words: Renal cell carcinoma, Metastatic ureteral tumor

緒 言

転移性尿管腫瘍は稀な疾患であり, 本邦では現在までに55例が報告されているに過ぎない. なかでも腎細胞癌の遺残尿管への転移はきわめて稀で, 本邦では現在まで7例の報告があるのみである.

今回われわれは遺残尿管に転移した腎細胞癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する.

症 例

患者: 58歳, 男性

主訴: 肉眼的血尿

家族歴: 特記すべきことなし.

既往歴: 25歳時肺結核にて左肺部分切除術を受けている.

現病歴: 1987年11月, 左腎細胞癌のため根治的左腎摘除術を当科にて施行された. (Stage IIIA, clear cell subtype, G2, Inf α) 尿管に転移を疑わせる所見はなかった. 以後外来で経過観察中であったが, 1989

年6月頃より肉眼的血尿を認めるようになり, 数回膀胱タンポナーデとなった. 膀胱鏡にて, 左尿管口に暗赤色の径約3cmの腫瘍を認めた. 膀胱腫瘍あるいは左尿管腫瘍の疑いで同年8月30日手術目的にて当科入院となった.

入院時現症: 身長166cm, 体重50kg, 左下腹部に軽度圧痛ある以外著変なし.

入院時検査成績: Cr 1.9mg/dl と軽度上昇している以外検血, 血液化学に著変なし. 検尿上蛋白, 糖, ビルビリン, ケトン体を認めなかったが, 尿沈渣にて, RBC many/hpf, WBC many/hpf であった. 尿細胞診はバベニコロウ class I, 尿培養は陰性であった.

X線学的所見: 胸部写真は異常所見なし. DIP では右上部尿路には異常を認めないが, 膀胱内左側に約3×3cmの陰影欠損像を認めた. CT では膀胱内左背側に不整形の腫瘍陰影を認めたが, 左尿管の拡張は認めなかった (Fig. 1). なお腹腔内諸臓器への転移, リンパ節の腫大はCT上認められなかった. またRP施行するも, カテーテルは左尿管口より約1cmのところから挿入できず, 腫瘍は左尿管口付近より発生し

* 現大阪府立病院泌尿器科

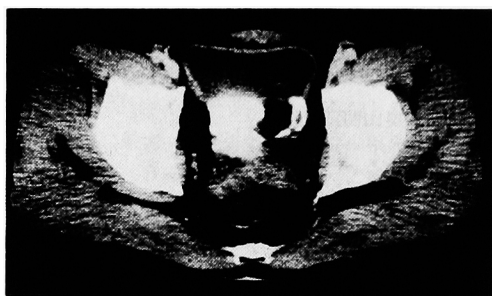


Fig. 1. Computed tomography showed the irregular low density mass on the posterior space in the bladder, but dilatation of the ureter was not detected.

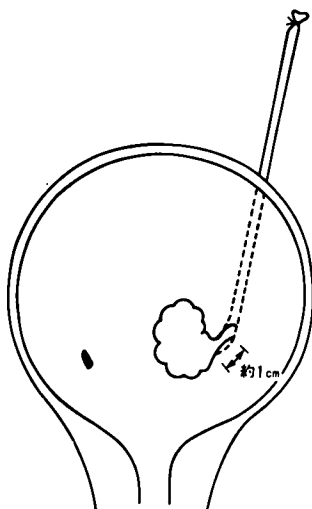


Fig. 2. The schema of the ureter and the tumor.

膀胱内へ突出しているのが確認された。以上より左尿管腫瘍と診断し、膀胱部分切除を含めた遺残尿管摘出術を1989年9月18日に施行した。

手術所見：左下腹部より後腹膜腔に入り、左尿管を見だしこれを distal にたどった。尿管はやや肥厚するも normal appearance であった。uretero-vesical junction に達し、膀胱を開いたところ、左尿管口より突出している腫瘍を発見、その先端部に blood coagula の付着を認めた。膀胱内外より尿管を剝離し ureterectomy を行った。

摘出標本：摘出した尿管は長さ 16 cm、左尿管口より 1 cm のところから有茎性の 3×2×2 cm の腫瘍を認めた。腫瘍表面は凹凸不整、全体に暗赤色調で特に色調の異なる部分はなかった。腫瘍はさらに暗血性の necrotic tissue に覆われていた。なお漿膜面への浸潤は肉眼的には認められなかった。模式的に示す

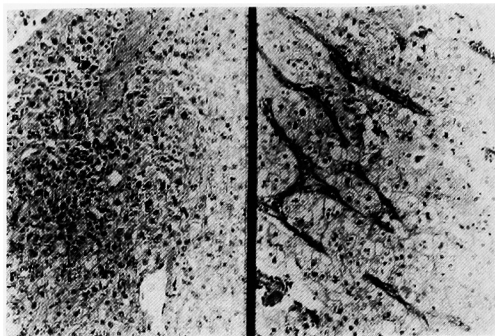


Fig. 3. Left: microscopic finding of the left kidney showing primary renal cell carcinoma, clear cell subtype. Right: microscopic finding of the residual ureter showing the same finding, clear cell subtype.

と Fig. 2 のようになり、腫瘍は尿管下端部より発生し、膀胱内に突出しており、尿管の拡張等はなかった (Fig. 2)。

病理組織学的所見：病理組織学的には renal cell carcinoma, clear cell subtype, 異型度は G2, 浸潤度は Inf α , 構築型は solid type であり、これは前回の手術時の病理所見と同じであった。なお筋層への明らかな浸潤は認めなかった (Fig. 3)。

術後経過：術後経過は順調で術後28日目に退院となった。

考 察

転移性尿管腫瘍は、Presman ら¹⁾によればリンパ行性または血行性経路を介した尿管壁への腫瘍細胞の増殖を認め、かつ近接臓器からの連続性浸潤を否定できるものとされている。三浦ら²⁾はこの定義に忠実な43例の転移性尿管腫瘍を報告しているが、今回われわれその後報告されたものを含め55例を集計した。最も多い原発巣は胃で22例、腎からの転移は、自験例も含め19例であった³⁻²⁰⁾ (Table 1)。男性14例、女性5例と男性に多く、転移経路はリンパ行性、血行性が大部分であると考えられるが、腎細胞癌の転移については、尿によって癌細胞が尿管に播種されることによって起こるいわゆる尿流性転移も考えられる。自験例もそうであると思われるが、ほかに島田ら²⁾、高村ら⁷⁾、鈴木ら¹⁵⁾の報告例は、粘膜病変がおもであり、ほかにリンパ節転移、血行性転移がなかったことより尿流性転移が有力であると考えられた。腎摘後の遺残尿管への転移は自験例を含め上記19例中8例であった。一般に転移性尿管腫瘍の予後は不良とされ、たとえば藤本ら²¹⁾は尿路閉塞症状がおもな時は、75%が6カ月以内に死

Table 1. 腎細胞癌尿管転移例

No.	報告者	年度	年齢	性	患側	原発部位	臨床症状
1	豊田ら ³⁾	1969	66	男	右	右腎	不明
2	加藤ら ⁴⁾	1971	56	女	右	右腎	右側腹部痛, 血尿
3	島田ら ⁵⁾	1973	71	男	左	左腎	血尿
4*	野積ら ⁶⁾	1977	47	男	左	左腎	血尿
5*	高村ら ⁷⁾	1979	39	女	右	右腎	血尿
6	関口ら ⁸⁾	1980	49	男	左	左腎	腰痛
7	小嶺ら ⁹⁾	1980	56	男	左	右腎	左側腹部痛, 無尿
8*	神部ら ¹⁰⁾	1981	59	男	右	右腎	血尿
9	野田ら ¹¹⁾	1981	68	女	左	右腎	無尿
10	米澤ら ¹²⁾	1981	74	男	右	左腎	頭痛, 食欲不振
11	相原ら ¹³⁾	1983	67	男	右	左腎	右側腹部痛
12	山口ら ¹⁴⁾	1984	55	男	左	右腎	腹部膨満, 尿量減少
13*	鈴木ら ¹⁵⁾	1985	64	男	左	左腎	排尿困難, 血尿
14	荒木ら ¹⁶⁾	1988	74	男	左	左腎	左側腹部痛
15	榎並ら ¹⁷⁾	1989	71	女	右	右腎	無尿
16*	金藤ら ¹⁸⁾	1989	72	男	右	左腎	血尿
17*	自験例	1989	58	男	左	左腎	血尿
18*	吉永ら ¹⁹⁾	1992	73	女	左	左腎	血尿
19*	志村ら ²⁰⁾	1993	71	男	左	左腎	血尿

* 遺残尿管への転移例

亡したと報告している。また Presman らによれば90%の症例で全身転移の一環として尿管にも転移病巣があったとされている。上記19例中对側尿管へ転移した症例は6例であり、このうち3例は他臓器への転移が認められ予後不良であると推定される。ところが遺残尿管への転移例については、予後不良と思われるのは金藤ら¹⁸⁾の1例のみで、残りの症例については特に短期間で死亡した症例はない。これは尿管以外の転移巣がなかったためと考えられる。また臨床症状としては8例全例が血尿を主訴としており、膀胱鏡上5例が尿管口よりの腫瘍の突出を認めている。これは遺残尿管の下部に腫瘍が生じたためと考えられ、腫瘍が発育すれば膀胱まで連続的に浸潤していくことも考えられる。

結 語

遺残尿管へ転移した腎細胞癌の1例につき、若干の文献的考察を加え報告した。

(なお、本稿の要旨は第129回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。)

文 献

- 1) Presman D and Ehrlich L: Metastatic tumors of the ureter. J Urol 59: 312-325, 1948
- 2) 三浦秀信, 岩佐 厚, 菅尾英木, ほか: 子宮頸癌を原発とした転移性尿管腫瘍の1例. 泌尿紀要 35: 1577-1580, 1989
- 3) 豊田尚武, 西 守哉, 後藤 薫: 尿管腫瘍ならび

に紛らわしいレ線像の症例. 日泌尿会誌 60: 810, 1969

- 4) 加藤篤二, 岡田謙一郎: 尿管転移を伴ったグラブイツ腫瘍の1例. 泌尿紀要 17: 528-531, 1971
- 5) 島田宏一郎, 大滝三千雄, 近沢秀幸, ほか: 転移性尿管癌の3例. 泌尿紀要 20: 523-527, 1973
- 6) 野積邦義, 岩間汪美, 真田寿彦, ほか: Grawitz腫瘍の下部尿管転移の1症例. 日泌尿会誌 68: 90-91, 1977
- 7) 高村孝夫, 波治武美, 野々村克也, ほか: 腎腺癌の尿管転移例. 日泌尿会誌 70: 1304, 1979
- 8) 関口 浩, 小松原秀一, 斎藤 稔: 腎細胞癌の精索および尿管転移の1例. 西日泌尿 42: 87-93, 1980
- 9) 小嶺信一郎, 相戸賢二, 江本侃一: 腎癌の対側尿管転移例. 西日泌尿 42: 115-118, 1980
- 10) 神部照夫, 福山拓夫, 中川清秀: 腎細胞癌の尿管転移の1例. 日泌尿会誌 72: 252, 1981
- 11) 野田春夫: 追加報告. 日泌尿会誌 72: 252, 1981
- 12) 米澤正隆, 今川章夫, 竹林治朗: 対側尿管に転移した腎癌の1例. 臨泌 35: 1087-1090, 1981
- 13) 相川 厚, 中村 薫, 橋 政昭, ほか: 対側尿管に転移した腎細胞癌の1例. 日泌尿会誌 74: 461, 1983
- 14) 山口安三, 牛山知己, 太田信隆, ほか: 対側尿管に転移をみた腎癌の1例. 日泌尿会誌 75: 351-352, 1984
- 15) 鈴木康之, 三木 誠, 吉田正林, ほか: 遺残尿管に転移した腎細胞癌の1例. 臨泌 39: 943-945, 1985
- 16) 荒木富雄, 加藤廣海, 斎藤 薫: 腎腫瘍の同側尿管転移の1例. 日泌尿会誌 79: 184, 1988
- 17) 榎並宣裕, 宮部憲朗, 川倉宏一, ほか: 対側腎盂

- 尿管に転移した腎癌. 臨泌 **43** : 53-56, 1989
- 18) 金藤博行, 入沢千晶, 加藤弘章, ほか:尿管断端に再発した腎細胞癌の1例. 日泌尿会誌 **80** : 433, 1989
- 19) 吉永英俊, 松下和弘, 安芸雅史, ほか:遺残尿管転移を起こした腎細胞癌の1例. 西日泌尿 **54** : 482-485, 1992
- 20) 志村英俊, 三浦 猛, 近藤猪一郎:遺残尿管に転移をきたした左腎腫瘍の1例. 泌尿紀要 **39** : 257-260, 1993
- 21) 藤本宣正, 市川靖二, 中野悦次, ほか:転移性尿管腫瘍の1例. 西日泌尿 **49** : 137-142, 1987

(Received on December 4, 1992)
(Accepted on October 29, 1993)